

氏名	山下 有 美
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	甲 第 3240 号
学位授与年月日	平成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	正倉院文書からみた写経機構の研究
論文審査委員	主 査 教 授 柴原永遠男    副主査 教 授 広川 禎秀 副主査 教 授 毛利 正守

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、正倉院に伝来した皇后宮職・造東大寺司管下の写経機構（皇后宮職系統写経機構）の事務帳簿・文書群の分析を通じて、この写経機構の変遷、内部機構、運営の実態、所管官司の性格と変化、写経事業の意義などを、官僚機構論・政治史と関係させつつ、多面的かつ総合的に解明しようとしたものである。まず「はじめに」で、これまでの研究史を整理検討しながら、本論文の基本的課題を明らかにし、以下三章九節にわたって論述している。

第 1 章「正倉院文書を伝えた写経機構」は、写経所の変遷を、上級官司や関係寺院とのかかわりで明らかにし、写経所の内部機構を解明することをめざしている。

第 1 節「写経機構の変遷」では、藤原光明子家の写経組織を母体として、皇后宮職の成立とともにその管下に組織された写経機構が、福寿寺写経所の段階までは、いっかんして皇后宮職の管下にあったが、天平 14 年 5 月末以降の金光明寺写経所からは、皇后宮職のもとから離れて、国分寺造宮機構である金光明寺造物所の管下に移り、以後最後まで、その後身の造東大寺司の管下に位置し続けたとする。

第 2 節「内部機構と正倉院文書の形成」では、写経所は、案主曹司・曹司という事務局と、堂（南堂・北堂、東堂・西堂）という作業場からなり、複数の案主が事務局で共同運営を行ない、そこに集積された事務書類が正倉院文書の核をなしたとする。また、造東大寺司全体で制度化された別当制が写経所にも及び、それによって配属された別当によって、写経所の運営が強化されたとする。

第 2 章「勅旨写一切経所について－皇后宮職写経機構の性格－」は、正倉院文書を伝えた皇后宮職系統写経機構の性格を明らかにし、奈良時代政治史に位置づけることを目的としている。

第 1 節「正倉院文書を伝えた写経機構（皇后宮職系統写経機構）の性格」では、皇后宮職系統写経機構は、内裏系統写経機構との関連で考察すべきであるという視角を提示したあと、皇后宮職系統写経機構が「勅旨によって一切経を写す所」として位置づけられていたことを指摘して、問題の糸口を提示する。

第 2 節「五月一日経の位置付け」では、皇后宮職系統写経機構の活動の基本をなす五月一日経の写経事業は、天平 5 年ごろから開始され、天平 8 年 9 月から基準を開元釈教録に変更し、さらに天平 14 年中にはあらゆる仏典の集大成をめざすようになり、大きく性格を変えたとする。これに対応して、王権による五月一日経の位置づけは、光明皇后個人の国家安寧祈願をこめた一切経から、国分寺に備える一切経、官大寺に備える一切経、一切経疏の転読講説体制の基本をなす一切経と、つぎつぎと変化したとする。また、五月一日経の写経事業は、国分寺造宮・盧舎那仏造願と一体の事業であったとする。

第 3 節「内裏系統写経機構との関係」では、内裏系統写経機構の変遷を追ったあと、この写経機構で写された景雲一切経の性格を検討する。それによって、景雲一切経は、質量ともに五月一日経を凌駕しようとしたもので、五月一日経に続く勅定的一切経であったとする。また、景雲一切経の完成後、神護景雲～

宝亀年間に一切経10部の写経事業が内裏系統写経機構によって計画され、造西大寺司と造東大寺司管下の写経所に写経が委託され、その一部が実現したとする。

第4節「皇后宮職系統写経機構の性格」では、天平から宝亀年間まで、内裏系統写経機構と皇后宮職系統写経機構が並び立ち、五月一日経と景雲一切経という2つの勅定一切経を創出した。これらを、聖武天皇・光明皇后・孝謙天皇の三位一体の王権によって代表される国家的仏教事業であり、国分寺造営・東大寺造営・大仏造立と不可分の関係にあると位置づけている。

第3章「写経機構再論」は、第1章で明らかにした写経機構の内部機構と、上級官司の性格とを、事務運営の実態、人的構造を軸に、より具体的に解明することを通じて、別当制導入の意義、それが正倉院文書にとって持った意味、上級官司たる造東大寺司の構造、さらには官司生成のあり方を解明せんとすることをめざしている。

第1節「別当・案主・領」では、案主と領の職務内容の分析、ならびに天平宝字年間の長大ないくつかの解移牒案の分析から、別当・案主・領・雑使の性格をさぐる。別当は、造東大寺司管下の諸所から外部にあてて出す文書に用いられる肩書きで、この点では案主という肩書きと共通しているが、別当は主に造東大寺司本来の官人が配属されたものであるのに対して、案主は、他官司から造東大寺司に出向しているものが、さらに管下の諸所に配されたものであるとする。諸所の管理運営にかかわるものはすべて領であるが、領のなかでその所の文書を発行できる資格を持つものが案主であり、その資格を持たずに下働きの雑用に従事するものを雑使といったとする。

第2節「写経所運営担当者」では、上級官司から史生・舍人クラスのもものが写経機構に配属され、写経機構の運営にあたるというシステムが、東大寺写経所以前の写経機構の各段階ごとに機能していたことを具体的に検証し、このようなシステムの展開上に、天平宝字2年に別当制が成立したとする。

第3節「造東大寺司の構造」では、造東大寺司の構成員は、四等官その他の中枢部をしめる同司本来の官人と、他官司からの出向者からなる。この前者の存在が造東大寺司が官司である所以であり、それがいない金光明寺造物所とのちがいである。前者のうちの第3等官・第4等官と後者の一部は、造東大寺司管下の諸所に配属され、別当や案主・領として所々の運営を分担する。写経所をはじめとする諸所は、独自の官人をもたない点で官司ではないが、2人配される別当が、上位別当・下位別当として事実上長官・主典として機能することによって、諸所は疑似的に官司の様相をおびてくる、とする。また、別当制の導入によって、造東大寺司ならびに諸所の機能が変化し、別当に与えられた権限によって、新たに作成される帳簿が生じ、正倉院文書に新しい要素が加わってくるとする。

「おわりに」では、本論文で明らかにした写経機構の構成、組織原理、運営のあり方などは、一写経機構にとどまらず、国家機構の研究にも適応できることを指摘したあと、今後の課題を整理して、本論文を締めくくっている。

## 論文審査の結果の要旨

正倉院文書は、皇后宮職から造東大寺司にいたる上級官司のもとに所属していた写経機構（皇后宮職系統写経機構）の事務組織が残した一大史料群である。本論文は、この史料群の分析を通じて、皇后宮職系統写経機構の生成・発展・消滅の全過程、運営の実態、内部機構の変遷、歴史的性格を、多面的・総合的に解明することを直接の目的とする。

正倉院文書の研究は、これまで、そこに含まれる戸籍・計帳・正税帳その他の重要史料を、断片的・部分的に利用する段階に長らくとどまってきた。しかるに、近年にいたり、このようなトレジャー・ハンティング的段階を克服し、正倉院文書そのものの構造、形成・伝来過程、様式・機能などを全体的に問うという研究動向が、ようやく主流となりつつある。このような動向こそ、正倉院文書研究の本来の姿というべ

きで、しだいに研究が蓄積されつつあることは喜ばしい。しかし、一面、正倉院文書そのものの変幻自在ともいべき可塑性、多様性、省略性、断片的性格、二次的整理による混乱等々によって、写経機構や正倉院文書の本質といった根本的部分に切り込むことが容易でなく、それを突破する研究の進展が待望される段階に到っていたといえる。

本論文は、このような研究状況を打開すべく、正倉院文書の徹底的な読み込み・復原・解析を通じて、上記の根本的諸課題の解明をめざした意欲作である。この点をまず高く評価した上で、以下、審査結果を述べる。

「はじめに」では、正倉院文書の研究史と、それがはらんでいる問題点を整理し、本論文の研究課題として、①上級官司との関係で、皇后宮職系統写経機構の変遷を明らかにすること、②この写経機構の性格を、内裏系統写経機構との関係で、全体的に把握すること、③この写経機構の内部構造を解明し、運営の実態を明らかにすること、を設定している。これらの研究の現状把握と課題設定は、的確であると判断される。

第1章「正倉院文書を伝えた写経機構」の第1節「写経機構の変遷」では、皇后宮職系統写経機構の成立から消滅にいたる複雑な全過程が、上級官司の変遷、写経機構設置寺院の変化とあわせて、総合的に明らかにされている。これらの成果は、1枚の変遷図に明解に集約整理されており、有用である。

第2節「内部機構と正倉院文書の形成」では、前節で明らかにされた複雑に変遷する皇后宮職系統写経機構の内部構造が、全面的に解剖され、白日のもとにさらけ出された。このこと自体、はじめての成果として高く評価できる。時として論が先走る場合があるが、これによって、正倉院文書形成の母体にかんする理解が進み、難解な個々の正倉院を解釈する足がかりが得られたことも重要である。

第2章「勅旨写一切経所について－皇后宮職写経機構の性格－」では、第1節「正倉院文書を伝えた写経機構（皇后宮職系統写経機構）の性格」で、皇后宮職系統写経機構が「勅旨写一切経所」に認定されたことを指摘し、その意味を解くべきであるという注目すべき論点を提示している。

これを受けて、第2節「五月一日経の位置付け」では、まず、勅旨写一切経所による光明皇后発願五月一日経の写経過程の変遷を、詳しく検討している。その結果は、長らく通説であった皆川完一説に重大な修正を迫るものとなっている。ついで、その変遷に応じて、王権による五月一日経の位置づけが変化したことを、これまた詳細にあとづけている。この点は、これまで深く検討されたことのない論点であり、今後大いに議論的となる問題提起と受けとめることができる。

第3節「内裏系統写経機構との関係」では、景雲一切経を、五月一日経につぐ勅定一切経と位置づけたことが重要である。これによって、奈良時代に行われた多くの写経事業を、正当な重みづけをもって俯瞰することができるようになった。また、神護景雲～宝亀年間の写経事業は、正倉院文書の中では比較的多くの史料が残っているが、その意味が明らかにされたことの意義も大きい。

第4節「皇后宮職系統写経機構の性格」では、勅定一切経の創出を、国分寺造営・東大寺造営・大仏造立などと不可分の関係にある仏教事業としてとらえ、皇統断絶の危機を克服するためのイデオロギーの一環と位置づけていることが注目される。

第3章「写経機構再論」の第1節「別当・案主・領」ならびに第2節「写経所運営担当者」では、正倉院文書に頻出する別当・案主・領や雑使などの肩書きの意味するところを明らかにするために、考課関係史料や解移牒案、上日案、食口案その他の分析に取り組んでいる。これらは、あまりに膨大複雑な史料であるため、これまで手をこまねくばかりで、だれも十分に分析しきれなかったものである。ここでは、それらをかなりの程度まで捕捉し、別当・案主・領の職務、権限を明らかにすることに成功した。これらの肩書きは、これまであいまいに理解され、漠然と使用されてきたものであるが、この2節によって、はじめてその意味が明らかにされたことの意義は大きく、今後の皇后宮職系統写経機構の運営論、構造論の基

礎が捉えられたといって過言でない。ただ、対象の融通無碍さによって、やや未整理の部分を残したといわねばならない。

第3節「造東大寺司の構造」では、造東大寺司の構成員を分析の俎上にのせている。造東大寺司の構成員の一部が、その下部組織である諸所に配属されて、諸所の管理運営を行う事情を、前2節の検討結果とあわせて、詳細に描き出している。また、このような管理運営方式の中から生み出された別当制により、上位別当と下位別当が事実上、長官―主典として機能することで、諸所が疑似的な官司の様相を帯びてくることを明らかにし、諸所を令外の官生成の母体と位置づけた点は、律令官司制研究にかんする重要な提言と受けとめることができる。さらに、正倉院文書の形成と別当制とを結び付けて論じている点は、正倉院文書の現状の一部を的確に説明している。

以上のように、本論文は、複雑多岐で不明な部分が多く残されている正倉院文書の森に果敢に深くわけ入り、これまで未知だった部分の詳細な地図と、全体的な見取り図を提示することに成功しているといえる。正倉院文書研究の新しい動向における重要な成果と評価することができよう。時に論の鋭い展開に証明が追いつかない場合があったり、わずかだが重複部分があるが、それらはいわば瑕瑾というべきものであって、本論文の価値を損なうものではない。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。